

氏名（本籍）	井上 真人（岐阜県）
学位の種類	博士（医学）
学位授与番号	乙第 862 号
学位授与日付	平成 5 年 7 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	「ストレスとストレス処理に関する質問紙」の産業保健への応用に関する研究
審査委員	（主査）教授 岩田 弘 敏 （副査）教授 小出 浩 之 教授 清水 弘 之

### 論文内容の要旨

近年、生活環境の多様化、複雑化が進み、人々の心理的・社会的ストレスが増大している。職域においても、業務内容の高度化、複雑な人間関係等により様々な産業ストレスが生み出され、メンタルヘルスへの取り組みが重要な課題となってきた。

本研究は、八尋が申請者らと数年かけて作成した「ストレスとストレス処理に関する質問紙」(Stress & Stress-Coping Questionnaire, 以下SSCQとする)が、職域社会、地域社会に実利的に用いられるかどうか検討してみたものである。

#### （対象と方法）

対象者は、岐阜市周辺の3事業所、すなわちO銀行の事務職131名、G情報処理センターの電算機入力業務担当者136名、K輸送用機械器具製造工場の中間管理職などの184名、それに、看護学校準看護婦（士）養成課程の学生（病院・医院にて看護助手として勤務している）31名、岐阜市と羽島市の中間に位置する都市近郊に在住する主婦104名、DSM-III-R(American Psychiatric Association, 1987)の基準に従い恐慌性障害と診断され治療を受けている患者36名である。

全対象者にSSCQ153問の調査を行った。この質問紙は、ストレスサーとして Life event（人生上の大きな出来事）と Daily hassle（日々の煩わしい出来事）、ストレスをどのように感じているかという評価に関して Anger（怒り）と Nervousness（神経質）、ストレス対処行動として Coping style（ストレスサーに対処する行動や構え）、Uplift（気分をたかめるできごと）、Hardiness（対処行動を支える背景となる性格上の強さ）および Social support（ストレス緩衝帯としての社会的な援助）、特定の疾患の危険因子を示す Type A（虚血性心疾患発症の心理社会的要因といわれる競争、攻撃性、時間切迫性）と Type C（悪性黒色腫症患者調査にて確認された、否定的感情を表出しない、権威に対する盲従といった行動パターン）の各尺度からなる。一方、Cornell Medical Index（以下CMIとする）日本版より抜粋問題81問の調査を行い、深町の分類に基づき、I群（心理的正常者）よりIV群（神経症者）までの4つの群に分類し、前述のSSCQと比較検討した。なお、O銀行では調査による負担が大きいことを理由にCMI調査は行えなかった。K製造工場では、担当職務、最終学歴、家庭状況の質問を追加した。G情報処理センターにおいては、質問紙による調査後、CMI深町分類Ⅲ群とⅣ群になった者に個別にカウンセリングを実施した。

調査は、1990年6月より1992年6月までに自記式で行った。

#### （結果と考察）

1) 事業所群、看護学生群、主婦群のうち、CMI深町分類Ⅳ群（神経症者）になった15名(3.3%)と、I群（心理的正常者）になった210名(46.2%)の両群で比較するとCMI深町分類Ⅳ群では Life event, Daily hassle, Anger, Nervousness, Type A, Type Cの各尺度は有意に高値を示し、一方、Hardiness, Social supportの2尺度は有意に低値を示した。また上記のCMI深町分類Ⅳ群は恐慌性障害患者群に比してDaily hassleの尺度が有意に高値を示し、Social supportの尺度が有意に低値を示した。しかし、恐慌性障害患者とそれ以外で共にCMI深町分類Ⅳ群に属した者で比較すると、両群間に有意差を認める尺度は全くなかった。このように、事業所群、看

護学生群, 主婦群でも, ストレスとストレス対処行動に問題をもつものが存在し, このうち深町分類IV群(神経症者)の者のストレスとストレス対処行動は, 恐慌性障害患者群のそれとほとんど変わらないことが明らかとなった。

2) 事業所群, 看護学生群, 主婦群でCMI深町分類I群(心理的正常者)209名について, 性別年代別に, SSCQの各尺度得点の平均値を比較した。性別にみると, Anger, Coping style, Hardiness, Social support, Type A, Type Cの各尺度は, 男性群が有意に高値を示した。性別年代別にみるとAngerの尺度では, 女性で, 10歳代群が20歳代群および60歳代群より有意に高値を示した。Coping styleの尺度では, 男性で, 20歳代群が50歳代群より有意に低値を示した。Upliftの尺度では, 男性で, 20歳代群が40歳代群および50歳代群より有意に低値を示した。Hardinessの尺度では, 男性で, 30歳代群が50歳代群より有意に低値を示した。このように各尺度で性別年代別に差異が認められたため, 事業所群, 看護学生群, 主婦群でCMI深町分類I群(心理的正常者)となった者のうち, 性別年代別に10名以上含まれる群, すなわち, 20歳代男性および女性, 30歳代男性および女性, 40歳代男性および女性, 50歳代男性の計7群それぞれで, ストレスとストレス対処についての各尺度得点の正常者の片側上限を97.5%(ストレス対処の尺度では片側下限2.5%)とした値を求めた。そしてそれ以上(ストレス対処の尺度では基準値以下)になった者を要指導者とすることにした。

3) ストレスおよびストレス対処についての要指導者を事業所別に比較してみると, O銀行では, ストレッサーが多く, ストレスに対し怒りの反応の強い者が多く, 虚血性心疾患の心理社会的要因といわれるType Aの傾向が強く認められた。電算機処理の多いG情報処理センターでは, ストレス対処行動の手段が少なく, ストレスを受けた際に周囲の援助が得られていないなど, ストレス対処行動の弱さを認めた。K製造工場管理職では, ストレッサーは少なく, ストレス対処行動に優れていた。

4) 家庭状況について, K製造工場で子供の有無で比較したところ, 子供のない群がDaily hassleとNervousnessの2尺度で高値を示し, ストレッサーの多さと, ストレスに対して神経質, 過敏になる傾向を示していた。

5) 対象を地域社会に広げてみると主婦, とくに高齢者の家族の在宅介護にあっている者はストレッサーの多さと, Coping style, Hardiness, Social supportの尺度で, ストレス対処行動が劣ることが示された。主婦のうち農業従事者と非農業従事者を比較すると農業従事者がSocial supportの尺度で低値を示した。

6) 准看護学校学生では, ストレッサーの多さと, ストレスに対して怒りや神経質といった反応が強く示され, ストレス対処行動の面で, 気分を明るく持ち上げていくことが少ないように思われた。

以上, SSCQを用いたストレスとストレス対処行動の調査は集団のストレス健康調査測定に有用であり, また, 個別に利用しても, SSCQは, 個人がさらされているストレスを明らかにするとともに, ストレス対処の弱点をつきとめることができるものと考えられる。

### 論文審査の結果の要旨

申請者 井上真人は八尋らと共に作成した「ストレスとストレス処理に関する質問紙」を用いて, 恐慌性障害外来患者と対応させながら, いくつかの事業所, 看護学生, 家庭の主婦を対象に, この質問紙の有用性について調査検討した。その結果, この質問紙から得られたストレッサー, ストレス対処行動, ストレス疾患形成に与える性格因子には, 性, 年代, 業種, 職制, 家族構成により, ほぼ共通の特性を示すこと, かつ個人的にも評定しうることを明らかにし, この「質問紙」ならびにその評価法がストレス過多の産業事業所での精神保健活動のみならず, 高齢化に伴う家庭介護者に対する地域精神保健活動にも有効利用しうる価値があると考え, 衛生学・公衆衛生学に寄与するところが大きいものと認める。

---

#### [主論文公表誌]

「ストレスとストレス処理に関する質問紙」の産業保健への応用に関する研究

平成5年5月発行 岐阜大医紀 41(3): 601~614